

登場人物

葉子 (三二歳) 草太の担当保育士  
美咲 (二五歳) 葉子の後輩  
君枝 (四八歳) 園長

保育園の乳児室。

十二月の夜。

中央におやつ机。子供用のいすが一つ。

机の上には、色とりどりの折り紙。はさみやのりの入った道具箱。

上手奥に廊下に出る引き戸。

周囲の壁には、美しく飾られた折り紙の鎖飾り。

エプロン姿の葉子がおやつ机で鎖飾りを作っている。

出来上がった鎖飾りが机の上で山になっている。

葉子、長さを確認しようと、山の中から鎖飾りをたぐり寄せる。

引っかかって上手くたぐれない。

力を入れて引くと、ぷつりと切れた。

葉子、切れたところを見つめる。

背後に美咲が現れる。

美咲 やめればいいのに。

葉子、驚いて振り向く。

美咲 どうせキリストなんか信じちゃいないんだから。

葉子 いつからいたの。

美咲 去年のクリスマス마스最低でしたよ。不謹慎だからって言ったのに、子どもたちが楽しみにしてるからって主任が押し切つて。

葉子 ……。

美咲 だけど葉子先生は体調崩してるし、他の先輩たちは手伝ってくれないし、結局ほとんど私一人で。

葉子 なにしに来たの。こんな時間に。

美咲 電気がついてたから、まだ残業してると思って。

美咲、葉子の隣に腰をおろす。  
美咲、鎖飾りに手を伸ばす。

美咲 まだ作るんですか、こんなにあるのに。  
葉子 触らないで。

美咲、鎖飾りを手に取り、眺める。

葉子 どうやって入ったの。

美咲 え。

葉子 玄関もう閉まってたでしょ。

美咲 いっだっていますよ。

葉子 は？

美咲 何度も会ったじゃないですか、ここで。

葉子 もう辞めたのかと思ってた。

美咲 なんで辞めなくちゃいけないんですか。

葉子 園長も傍聴してたんだよ。

美咲 知ってます。目、合いましたから。

葉子 美咲先生はもう来ないつもりだろうって、園長言ってた。

美咲 だけど園が訴えられたわけじゃないんだし、

葉子 変わんないよ、市が相手じゃ。

美咲 私だって悩んだんです。先輩たちが黙ってるのにいいの  
かなって。

葉子 誰に頼まれたの。

美咲 は？

葉子 頼まれたんでしょ、証言してくれて。

美咲 誰にって。

葉子 支援団体とかいるでしょ、いろいろ。

美咲 いませんよ、そんなの。

葉子 私を訴えればよかったのに。

葉子、切れたところを修復し、飾り作りを再開する。

美咲 先生だけのせいじゃありませんから。

葉子 無理しなくていいよ。

美咲 葉子先生も知ってますよね。草太君のお母さん、何度も  
ここにきて、あの日のこと教えてくれて。

葉子 ああ。

美咲 一度だけ話したんです。喫茶店で、弁護士さんも一緒に。  
あの時わかったから。ひとりを責めたってしょうがないって。  
葉子 でも証言した。私が草太君ちゃんと見てなかったって。

美咲 それは、状況聞かれて。  
葉子 状況って。

美咲 葉子先生は草太君の隣りにいた。(子供用いすを指して)  
草太君がここでおやつ食べてる間。

葉子 連絡帳書いてたんでしょ。草太君に背中向けて、ずっと。

美咲 ……。

葉子 違うの。

美咲 ……。

葉子 最低だね、草太君が喉詰まらせたのにも気が付かないで。

美咲 私もよく子どもがおやつ食べてる間に連絡帳書いてたから。私が葉子先生の立場になってもおかしくなかったと思ってます。

葉子 でもあの子は私の担当だから。

葉子、立ち上がって、鎖飾りを壁に飾り始める。

美咲 葉子先生も証言してくれませんか。

葉子 は？

美咲 私は先生も被害者だと思ってます。

葉子 やめてよ。草太君は亡くなつたんだよ。私が目離さないで、ちゃんとお茶あげてたら助かったかもしれないのに。

美咲 でも恨みがあったわけじゃないですよね。

葉子 当たり前でしょ。

美咲 じゃあなんで目離したんですか。

葉子 なんでって。

美咲 考えて下さい、どうして目を離したのか。

葉子 わかんないよ、そんなこと。

美咲 そうしなくちゃ仕事が終わらなかつたからですよね。これだけ残業してるのに、いくらやっても終わらない。

葉子 そんなの言い訳だよ。

美咲 でもそこを変えなくちゃ、また。

葉子 だから話し合ってたでしょ。これからどうやって事故を防ぐか。

美咲 お茶をちゃんと飲ませるとか、のど詰まらせてないか声をかけるとか。そんなこと言われなくても気をつけてますよ。もっと根っここのところを話さなくちゃ。

葉子 市の管理責任とか、そういうこと？

美咲 この忙しさは私たちだけのせいじゃないんです。

葉子 いいかげんにしてよ。

美咲 本当はゼロ歳児クラスだったんですよ、草太くん。

葉子 そうだけど。

美咲 なんで一、二歳児の部屋に移したんですか。

葉子 ゼロ歳児クラスいっぱいだったし。草太君もう一歳になつてたから、

美咲 一、二歳児クラスは一人で六人も子ども見ないといけなののに、ハイハイし始めたばかりの子と、走り回ってる二歳の子を一緒に見るなんて無茶ですよ。

葉子 そりゃそうかもしれないけど。園長から言われて。

美咲 しかもお母さんには報告もしてなかった。

葉子 ……。

美咲 一、二歳児クラスって、本当は一人あたり三・三平米確保しなくちゃいけないそうです。国の基準でそう決まってる。この部屋で預かってた子は二歳児が十二人、一歳児が十六人。一人あたり一・六五平米しか確保できてない。国の基準の半分ですよ。なのに、市は基準を勝手に解釈して許可してた。

葉子 やめてよ。

美咲 私、弁護士さんに言われるまで考えたこともなかった、私たちがなにを強いられてたかなんて。だから、

葉子 やめてってば。

セロテープが剥がれて鎖飾りが落下する。

葉子、剥がれた部分を貼り直す。

美咲 証言、してくれませんか。

葉子 ……。

美咲 葉子先生。

葉子 そりゃ市がたくさん予算を割いて、保育園増やしてくれたいよ。だけど、それまでどうすんの。増えるまで何年もかかるのに、それまで子ども預けられない人は。

美咲 だからって、こんなやり方じゃ。

葉子 それにもしいますぐ園児の数減らせて言われたらどうすんの。やっと入れた人もいるのに、ほか行ってくださいっていうの。

美咲 それは市がちゃんとすべきで。

葉子 悠長なこと言わないでよ。いま困ってるの、いま。

美咲 ……。

葉子 私たちは上を信じて職務をこなすしかないんだって。そ

れ以上のことなんて求められてない。

美咲 でも先生だって子ども安心して預かりたいでしょ。

葉子 じゃあ言うけど、あんたが証言で休んでる間こっちがどれだけ大変だったか分かる。クリスマスマスの準備でただでさえ忙しいのに、園長も傍聴行ってほとんどいないし。

美咲 それは申し訳なかったと思ってます。

葉子 あんたは正義のつもりかもしれないけど、そのせいで事故でも起きたら、どう責任とるつもり。

美咲 ……

葉子 人に迷惑かけといて、偉そうなこと言わないでよ。

鎖飾りの一部が再び落下する。

葉子、貼り直す。また別の場所が落下する。葉子、いらつく。

美咲、落下した箇所を引っ張る。

鎖飾りが引っ張られ、大きく剥がれる。

葉子 なにすんの。

美咲 テープだけじゃ止まらないですよ。

葉子 だからって剥がさないでよ。

葉子、落下した箇所を必死で押さえる。

美咲 画鋲使った方がいいですよ、上からテープ貼っとけば落ちませんから。

葉子、振り返って、美咲を睨む。

二人、にらみ合う。

葉子 園長が言った。あんたの証言は全部想像だったって。

美咲 違う。何人も証言してくれました。だけど、名前は出せないから。

葉子 そんなんで勝てるわけないじゃない。

美咲 裁判長はちゃんと聞いてくれてたと思います。

葉子 市の責任認めたら、県や国の責任だって。

美咲 わかっています。市に基準の解釈を指導してたのは県だし、国の基準は、戦後すぐに定められてから一度も見直されてない。そもそもこの最低基準が古くなってるから。

葉子 そんな国まで巻き込む判決、裁判所が下すと思う。

美咲 負けても、注目されればいいんです。少なくとも基準の

解釈はごまかせなくなる。

葉子　うちの園はどうなってもいいって言うの。

美咲　保育全体が良くなるなら。

葉子　文句言うのは簡単なの。黙って決められたことをやっていくのが大人ってのもんでしよう。

美咲　そうでしょうか。

葉子　え。

美咲　文句言うの簡単ですか。クビになるかもしれないのに。黙って従う方が楽じゃないですか。

葉子、道具箱からガムテープを出して、鎖飾りを貼り直す。

美咲　見えてますよ、ガムテープ。

葉子　……。

美咲　画鋏の方が。

葉子　帰ってよ、仕事になんないから。

美咲　だけどまだ。

葉子　関係ないでしょ。どうせ部外者になるんだから。

美咲　私辞めません。

葉子　……。

美咲　草太君のお母さんに言われたんです。辞めちゃ駄目よって。先生が悪いわけじゃないんだからって。

葉子　覚えてる？　保護者向けに説明会開いたでしょ。平日だったのに、下の遊戯室がいっぱいになって、厳しく詰め寄せられるんだと思ってた。なのに、集まった親御さんたちみんな、園長が事故の経緯説明して、今後は気をつけますって頭下げたらあっさり納得してた。根っここのところをついてくる人なんか一人もいなかった。

美咲　それはみんな言葉を失ってて。

葉子　そうじゃない、あの人たちは、根っこを叩けば、この園が崩壊するってわかってるの。

美咲　まさか。同じ保育園にいた子が亡くなったんですよ。

葉子　だからこそよ。こんな時だからこそ園を守らなくちゃ、なくなったら困るって。無意識に。

美咲　そんな。

葉子　私も困る、ここがなくなったら。あんたから見たら間違ってるかもしれないけど、こうでもしなくちゃ守れないものもあるんじゃないの。

葉子、美咲を見据える。

葉子 草太君のお母さん、ネットでだいぶ叩かれてるね。ゼロ歳から預けるなんて可哀想。信用できないなら預けるな。シングルマザーになる方が悪い。自己責任だって。

美咲 ひどいです、どうして子どもなくした人が叩かれないといけないのか。

葉子 壊すからよ。みんなが信じて、守ってるものを。

美咲 ……。

葉子 もういいでしょ。帰って。

葉子、飾り付けの続きをし始める。

美咲、壁に駆け寄り、鎖飾りを引っ張る。

鎖飾りの一部が落ちる。

葉子 ちょっと。

美咲 先生は怖くないんですか。

葉子 どいて。(ど、美咲が剥がした飾りを貼り直す)

美咲 私、あの日のこと思い出すと、今でも身体が震えます。

先生だって、あんなに泣いてたじゃないですか。

葉子、鎖飾りを押さえるが、なかなかつかない。

美咲、別の場所の鎖飾りを引きはがす。

葉子 なにすんの。

美咲 なにもかもなくしてみるんです。

美咲、次々と飾りを剥がしていく。

葉子 やめてってば。

美咲 なにもかもなくしてみるんです。

葉子、美咲が剥がした飾りを必死に押さえる。

美咲 (机を叩きながら) ここに、ここにいたんですよ、草太君は。

葉子 ……。

美咲 役人から見れば、この部屋に何人収容できるって、数字でしかないかもしれない。でも、ここに座っておやつ食べてた、小さな手でベビーカー握って。生きてたんです。

美咲、葉子の腕を掴む。

美咲 草太君、先生の腕掴みましたよね。喉詰まらせて、助け  
てって。

葉子 放して。

美咲、葉子を無理矢理おかし机の前に引っ張っていく。

美咲 ほら、ここでこうやって先生の腕掴んだでしょう。

葉子 (声にならない声で) やめて。

葉子、美咲の手を振りほどく。

美咲 葉子先生、草太君って叫びながら、口からカステラかき  
出していましたよね。養護の松田先生が吸引器持ってきて、吸引  
してもなにも出てこなくて、どうしていいかわかんないまま、  
草太君の顔が青くなっていった。吸引した中に血が混じった時  
は、みんな声も出なかった。葉子先生だけが、「やめないで、  
お願いやめないで」って、草太君の身体さすってたんです。な  
だれ込んできた救急隊の人たちに「なにやっつてんだ、どい  
て！」って怒鳴られるまで、ずっと。

葉子、這うようにしてガムテープを拾う。

震える手で、ガムテープを引き出し、ちぎる。

剥がれた鎖飾りをガムテープで貼る。

鎖飾りはゆがんだ形に貼り付けられていく。

美咲 なにやっつてんですか。

葉子 (怯えて) あ、ごめ……。

美咲 もうやめましようよ、クリスマスなんて。

葉子 やめない。

美咲 なんの意味もない。なにもなかったって示したいだけ。  
その飾りも。

葉子 子どもたち喜んでた。去年だって、園長がサンタクロー  
スになってプレゼント渡して。

美咲 大切なものはもっと他にあるでしょう。

葉子 準備しなくちゃ、クリスマス間に合わない。

美咲 草太君、病院に運ばれて、一ヶ月、生きてた。かろうじ  
て生命をつないでるだけだったけど、沢山のチューブをつけた



まま、お母さんが抱っこすることもできたそうです。

葉子 ……。

美咲 毎週行ってたんですよね、病院。一回だけ病室に入れてもらえて、絵本読んであげたって。

葉子 ……。

美咲 クリスマスの絵本。

鎖飾りが引っ張られて、大きく剥がれ落ちる。

葉子、落ちた飾りを引き寄せる。

葉子 草太君。

葉子、鎖飾りを抱きかかえる。

美咲、葉子を後ろから抱きしめる。

美咲 遠い昔のある晩のこと。

葉子 まっくらな夜空に大きな星がひかりました。

美咲 天使が現れて言いました。みんなが待っていた嬉しいこととが起りました。

葉子 みんなが待っていた嬉しいことは、イエス様のお誕生日でした。

美咲 草太君は人見知りで、知らない先生はもちろん、大きい子が近づくだけで泣いちゃうんです。

葉子 天使も羊も、イエスさまを見ると、

美咲 泣きながら、必ず私に向かって抱っこしてって、手を伸ばして。

葉子 心が幸せでいっぱいになりました。

美咲 抱っこしてやると、安心して眠るんです。そんなときはこの子にとって私は安心できる大人なんだなって、すごく幸せな気持ちになる。

葉子 イエスさまのお誕生おめでとう。

美咲 私は保育士の仕事に誇りを持っています。

葉子、鎖飾りを強く抱きしめる。

長い沈黙。

美咲、部屋を出て行く。

葉子、そのまま動かない。

君枝、入ってくる。

君枝 まだいたの。  
葉子 ……園長。  
君枝 どうしたの、そんなもの抱きしめて。  
葉子 (飾りから手を離し) すみません。なんでもありません。  
君枝 (部屋を見渡し) 飾りめちやくちやじゃない。  
葉子 いま直しますから。

葉子、ゆっくり立ち上がる。

君枝 まだかかりそうね。ツリーと電飾は倉庫にあるから出しとくわ。

葉子 あの美咲先生は。

君枝 美咲先生？

葉子 ……あ、いえ。

君枝 昨日も言ったけど、来ないわよ、美咲先生は。

葉子 はい。

君枝 今日電話して話した。このまま有休消化して辞めなさいって。あっさり同意してたわ。退職届は郵送するって。覚悟してたんでしよう。

葉子 そうですか。

君枝 ほんとに、あんな証言するなんてね。親とは立場が違うんだから、私たちはただ精一杯職務をこなすしかないのに。

葉子 そうですね。

君枝 文句言うのは簡単なの。子どもじゃないんだから、多少気にくわないことがあったって、黙って決められたことをやっていくのが大人ってのもんでしよう。今までだって、ずっとこのやり方でやってきたけど、なんの問題も起きなかったんだから。

葉子、呆然と君枝を見つめる。

君枝 なに？

葉子 いえ。

君枝 ちょっと疲れてるんじゃない。今日はもう帰んなさい。あとやつとくから。

葉子 あの日、あの子、朝からずっとぐずってて、君枝 なに。

葉子 お昼寝の時間になってもなかなか寝てくれなくて、歌歌ったり、散歩に出たりして、やつと寝付いたときには、もう私にくたくたで。……あの日はおやつバイキングでした。草太君だけ、お昼寝から起きるのが遅くなっておやつ食べてなかった。

あの子まだ好きなもの選べないから、私が選んであげなくちゃって、カウンターに行行って、私、どうやっておやつ選んだと思います？

君枝 さあ。

葉子 あの子まだスプーンが使えないから、ゼリーやプリンは私が食べさせないといけない。それは、面倒だ。ベビーカーステラなら、手づかみで、一人で勝手に食べてくれる。そうすれば、私は連絡帳書いていられる。お迎えの時間に間に合う。

君枝 ……

葉子 あの時、あの子の命は連絡帳より軽かった。

君枝 もういい。

葉子 なのに草太君のお母さん言うんです。泣いてる私を見て、辞めちゃ駄目よ。先生だけが悪いんじゃないって。

君枝 もういいから。忘れなさい。

葉子 ……

君枝 忘れるの。私を信じて。

葉子 ……

君枝 帰んなさい。

葉子 はい。

葉子、転がっているテープを片付け、エプロンを外し、服を整える。

君枝 明日はクリスマスよ。笑顔で出勤してね。

葉子 ……

君枝 出る時声かけて。鍵閉めるから。

君枝、葉子を置いて、部屋を出て行く。

葉子、動けない。

鎖飾りに触れることも、子供用のいすに手を伸ばすこともできない。

ただじっとその場に立ち尽くす。

溶暗。

幕。

第六稿 二〇一四年一月二二日

引用 「クリスマスおめでとう」ひぐちみちこ作 (こぐま社)